

黒羽芭蕉の館だより⑦

黒羽の芭蕉句碑(1)

芭蕉の句碑は、江戸時代以来建立され続け、現在、沖縄県以外の46都道府県に存在します。句碑や歌碑などは、それらが詠まれた地に建立されるのが一般的ですが、芭蕉句碑は発句の誕生地とは無関係の地にも立っています。これは江戸時代から俳諧に親しむ人々が多かったことを物語り、芭蕉を敬愛しその句碑の建立を悲願とする各地の門人や俳諧宗匠を中心とする連衆が多かったことを示唆しているのです。

芭蕉が2週間滞在した黒羽地区にも、9基の芭蕉句碑と1基の曾良句碑が存在しており、今回から3回に分けてこれらの句碑を紹介します。当館付近には4基の芭蕉句碑が立っていますので、今回はその内の3基を紹介しましょう。



「芭蕉の広場」内にある芭蕉句碑
「鶴鳴や其声に芭蕉やれぬべし」

ぬべし」で、「芭蕉の広場」にあります(碑高142cm)。この句は黒羽滞在中の作品で、曾良の「俳諧書留」に記され、「ばせをに鶴絵がけるに」という前書があります。この絵の鶴は鳴いているようで、その声に芭蕉(植物)の葉は破れてしまうだろう、という意味になります。

2基目は(田や麦や中にも夏のほとぎす)で、「芭蕉の道」の途中(黒羽城黒門跡)に立っています(碑高110cm)。この句は元禄2年(1689)4月7日(新暦5月25日)、浄法寺桃雪邸での吟です。「俳諧書留」には長文の前書が付されますが、句意としては、青々とした早苗と金色の麦全てが夏らしい風景であり、その中でも時鳥の声は特に素晴らしい、となります。

3基目は(行春や鳥啼魚の目は涙)で、「芭蕉の道」入口に立っています(碑高140cm)。過ぎゆく春を惜しんで鳥は鳴き、魚も涙ぐんでいるようであるという意味で、『おくのほそ道』の旅立ちにあたっての惜別の句です。「芭蕉の道」入口に建てる句として、『おくのほそ道』旅立ちの句が選ばれたのでしよう。

3基とも俳文学者の金子恵泉の筆により、平成元年(1989)3月、黒羽町が建立した句碑です。

■問い合わせ

黒羽芭蕉の館

TEL (54) 4151

彫刻

市内で作られた作品とその作者

周遊 ①⑥

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。

ふれあいの丘の南側にある大駐車場から、高台の「シャトー・エスポワール」に通じるS字状の道路沿いにある3体1組の彫刻です。

南側から、こね鉢のような丸い窪みをもったもの、トンネル状に横たわったもの、多数の丸い孔のあいた釣鐘状のものと並んでいます。それらを順に眺めていくと、平面にできたちょっとした窪みが徐々に高さのある立派な立体物に成長していく



Colony - 循環するかたち -

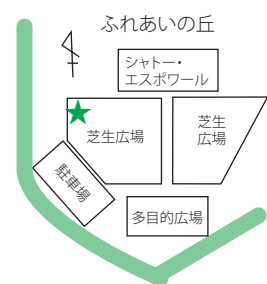
すずき のりお
鈴木 典生 1998年

さまとしてもとらえられます。

石という素材に改めて生命感を与えたいという作者は、さまざまな生命が関係して結びつき、過去から未来へ絶え間なくつながっていく、「生命の源である自然の循環」を表現したと言えます。この作品を通じてすべてが「循環の中に存在していることを感じてほしい」と期待しています。

作者の鈴木典生氏は、1965年茨城県生まれで、金沢美術工芸大学大学院修了。1992年のアートヒル三好ヶ丘'92彫刻フェスタ(愛知県三好町、現みよし市)でグランプリ、1998年の第3回木内克(きのうちよし)大賞野外彫刻展で木内克大賞などを受賞。現在も茨城県を拠点にして精力的に制作活動を行っています。

設置場所案内図(★印)



■問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718



鈴木 典生 氏